

疎経活血湯の化学療法誘発性末梢神経障害および慢性疼痛に対する治療法の探索

中村, 寛子

<https://hdl.handle.net/2324/6787552>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (臨床薬学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 中村 寛子

論文題名 : 疎経活血湯の化学療法誘発性末梢神経障害および慢性疼痛に対する治療法の探索

区 分 : 薬学府・臨床薬学・甲

論 文 内 容 の 要 旨

腰痛は国民を悩ます最も一般的な症状のひとつとみられ、QOL の低下をもたらす。わが国において病気やけが等で自覚症状のある者〔有訴者〕の中で男性では「腰痛」が最も多く、女性でも「肩こり」の次に「腰痛」が多い結果となっている。腰痛に対する治療は薬物療法、物理・装具療法、運動療法、患者教育と認知行動療法、インターベンション療法、手術療法、代替療法があり薬物療法と運動療法が推奨されている。慢性疼痛に対する薬物療法にはセロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害薬 (SNRI)、弱オピオイド、ワクシニアウイルス接種家兎炎症皮膚抽出液、非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs)、アセトアミノフェン、強オピオイド、三環系抗うつ薬などがあり、神経痛を伴う場合は Ca チャネル $\alpha_2\sigma$ リガンドが加わる。このガイドラインの中に漢方薬は含まれていないが、実際の現場では慢性腰痛に対し漢方薬が使用され、有効性も示されている。しかし、漢方薬の効果について多くの論文が発表されているが、そのほとんどが症例報告や症例集積研究であり、研究の質が高い randomized control trial (RCT) は存在していない。また、東洋医学には「証」という概念があり漢方薬はオーダーメイドの処方といえるため、患者背景を揃える RCT を行う難しさもある。しかし、実際の現場で処方される漢方薬がどのような効果を示しているのかを検証する意義はあると考える。疎経活血湯は関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛に効能をもつ漢方薬であるが、基礎研究の報告もわずかであり、症例報告も多くない。効能のある対象疾患に対してより繁用が可能となるためには、基礎研究や実際の処方例を検討することが必要と考え、研究を行うこととした。

まず第1章では、疎経活血湯およびデュロキセチンの単回投与が、オキサリプラチン誘発性機械的アロディニアおよび寒冷痛覚過敏、ならびにボルテゾミブ誘発性機械的アロディニアを完全に回復させた。一方、パクリタキセル誘発性機械的アロディニアは回復させなかった。したがって、疎経活血湯は、オキサリプラチンおよびボルテゾミブによって引き起こされる神経因性疼痛症状を緩和する可能性が示唆された。

第2章では、慢性腰痛患者に対して、インターベンショナル治療と疎経活血湯の併用療法が有効であることを示した。硬膜外神経ブロックやトリガーポイントブロック、アルプロスタジル注などのインターベンショナル治療と牛車腎気丸を併用しても、痛みに対する効果が不十分であった本症例は、血虚、水毒、瘀血の証をもち、夜間痛が発現していることから牛車腎気丸に代わり疎経活血湯の投与を開始したところ、VASスコアの数値の改善が見られた。このことより、インターベンショナル治療に加えて疎経活血湯の服用を行うことで腰痛を改善し、QOLを向上させる可能性が示唆された。

第3章では、宮前医院において疎経活血湯を投与された腰痛及び腰下肢痛患者9例について、visual analogue scale (VAS) スコアの推移より疎経活血湯の効果検討を行い、疎経活血湯は腰痛患者に対し、西洋薬による薬物療法及びインターベンショナル治療との併用において上乘せ効果が期待できることが示唆された。また腰下肢痛患者（膝痛患者も含む）においても、同様の傾向がみられた。東洋医学的な診断で血虚、瘀血、水毒のある腰痛及び腰下肢痛患者に対し、疎経活血湯を使用することにより患者のADLやQOLの向上が期待できると考えられた。

以上、本研究により、疎経活血湯がオキサリプラチンとボルテミゾブによる神経因性疼痛を抑制するデータが初めて示され、臨床現場において疎経活血湯を用いる際の有益な基礎的知見を得ることが出来た。また、ペインクリニックでの実際の臨床現場において、慢性腰痛及び慢性腰下肢痛患者の疎経活血湯の上乗せ効果の知見を得ることが出来、より適切に繁用されることによって患者のADLやQOLの向上につながることを期待する。